

「パーマー 消化器病学のポイント」

〔著〕 Eddy D. Palmer

〔訳〕 丹羽 寛文・金子 栄蔵

北里大学教授

岡 部 治 弥

別に大冊の Clinical Gastroenterology の著者でもある E.D. Palmer は、現在 Medical College of New Jersey で教鞭をとっているが、本書はもともと同校における卒前および卒後の臨床研修に役立つために、テキストブックの補遺として編んだものである。ところが学生や研修医の間ですこぶる好評を博したので、より多くの医師に広く利用してもらうことを意図して出版したという。したがって、文章はきわめて簡潔であり、箇条書き的ないし表示形式に記述されているところが多く、病態生理学や精しい説明は一切省いてある。しかし実際のな面は要領よく、かつ細かく記述されており、ベッドサイドの実地にただちに役立つ点が多い。また読者の参考のために目的として臨床消化器病学における一部の説や仮説についてもとりあげ、できるだけ簡明に記述するよう

に努めている。そして著者は議論は一切ぬきにして濃縮した記述をしているので読者がそこから深い思考を行うようその序文で希望している。

また現時点において学生に要求されている主題については十分考慮して幅広くとり入れたとしており、その記述は単に文献の評価や解釈を試みるよりも著者自身の観察と経験を大量にとり入れており、読者はそれを学び記憶すると共に最終的には読者自身が自分の経験と観察によって自分の結論をもってほしいと結んでいる。

第2版である本書は1971年出版の第1版に比べると活字は小さくなり、頁数もふえ、かなりその内容も濃くなっているが、それでも所期の目的である簡潔さは保たれており、たとえば出血の項における積極的診断法についての箇条書き的記述等は読んでいてその歯切れのよさは小気

味よい感じさえもつ。また本書の冒頭には著者の消化器病専門家としての哲学である総合消化器病学すなわち精神的なもの、ないし機能的な異常と器質的異常を総合的に考えるべきであるということについて簡明に記述しており、臨床消化器病学に対する心構えを教えてくれている。

前々から、私は本書を卒後研修医の恰好の実習書であると考え、昨年度はフレッシュマンの輪読会の教本としたのであるが、今回邦訳されて出版された次第であり、その分学生や研修医に手軽によめるようになったわけである。訳者もその序に原著者の文章の簡潔さを損わないように留意したと記しているが、読みやすく理解しやすい文章になっている。さらに原文が簡潔にすぎず判り難い所や、日本と実情が非常に異なる点については所々に訳註がついており、これは親切である。

本書は、広汎な消化器病学の領域を明解に分類記載したいわば「整理されたノート」とでもいうべき本で、臨床の実際に直ちに役立つと共に知識の整理に便利である。手許において常に参考とすべき便利な本であろう。

A5 頁246 図9 1977 年 ¥2,800

〒160 <医学書院刊>